

今回は、5 月 25 日と 6 月 8 日の 2 回にわたって行われた「合同巡検講演会」の様相についてお伝えします。

【海洋生物】

<概要>

5 月 25 日に、東北大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物研究センターの武田哲先生にお越しいただいて「浅虫海岸の生物と海洋生物調査法」についての講演会がありました。

潮間帯やその周辺の環境の変化の性質、実際に住んでいる生物などを教えていただきました。随所に研究のヒントが紹介されており、この講演を聞いて、具体的な研究のテーマが思い浮かんできた人も多いのではないかと思います。

例えば、先輩方のテーマで多かった海水の浄化の実験では海水に懸濁する粒子の選定や浄化具合の見極め方などの工夫が必要だと分かりました。また、カニやヒトデ、それらの生物の捕食や腕の再生の仕方など研究対象に選ばれやすいものに関しては、それぞれの生物の生態の特徴をあげながら実習の注意点を詳しく説明していました。

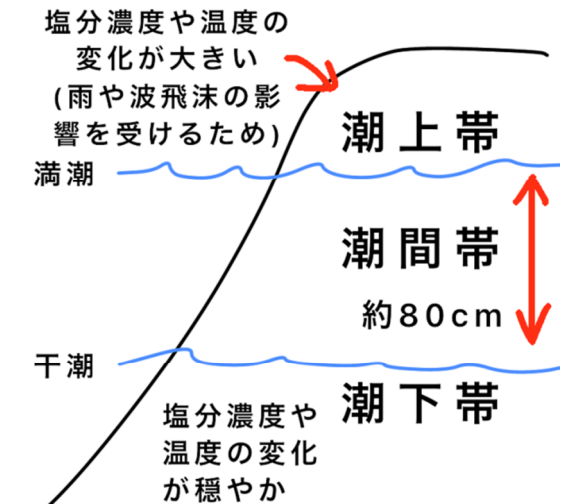
<浅虫海岸の環境>

潮上帯：塩分濃度や温度の変化が大きく、厳しい環境であるため生物は少ない（生息：タマキビ、カモガイ、フナムシなど）

潮間帯：イワガニ、イワフジツボ、ムラサキインコなど

潮下帯：塩分濃度や温度の変化は穏やかで、生物は豊富である（生息：ヨロイイソギンチャク、イトマキヒトデ、イカリナマコ、バフンウニなど）

・昨年はアメフラシが大量発生したが、今年も居るかは分からない。



<生徒の感想>

- ・実験の方法のヒントや実際に住んでいる生物などが分かり、実習の具体的なイメージができた。
- ・自分達が考えていたテーマについて、講演会を通して改善点や更に工夫できる点を見つけることができた。



【考古学】

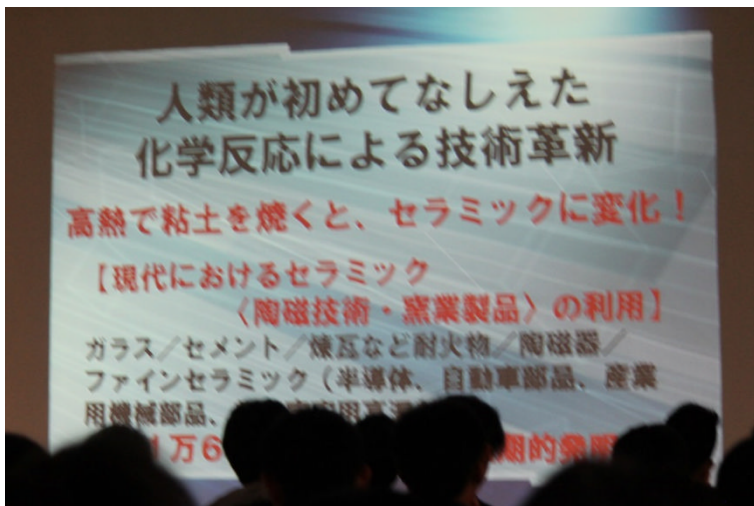
<概要>

6月8日に、東北歴史博物館の佐藤憲幸先生にお越しいただき、「縄文時代の東北地方～三内丸山遺跡を中心に～」と題し「そこに科学はあるのか？」というテーマで講演を行っていただきました。

縄文時代の東北地方で起きていた土器の技術革新や通説と異なってくる生活のしかたなどを、科学と結びつけて分かりやすくお話しされていました。歴史は最新の自然科学によって変わっていくもので、それまで通説とされてきたことでも塗り替えられることがあると知り、驚いた人も多かったのではないのでしょうか。

<通説と異なった説の例>

- ・縄文時代の始まりは氷河期終了後（1万2千年前）→1万6千年前の土器が見つかったため、この頃には縄文時代は始まっていた？
- ・弥生文化は北海道を除いた東日本を中心に広まった→東北地方北部では、稲作のリスクを考え、稲作を放棄して縄文時代の暮らし（狩猟メイン）に戻っていった（続縄文文化）



<生徒の感想>

- ・歴史と科学を結びつけるというのは斬新な発想だと思った。
- ・科学は、気候や生活の様子など昔のことを知るのに不可欠であり、歴史とは切り離せないのだと分かった。
- ・現代でも用いられているセラミックの技術が生まれており、昔の人々が既に化学反応を利用していたということに驚いた。

【編集後記】

これまでの講演会で、研究の仕方や物の見方、結果との向き合い方など多くのことを学ぶことができました。講演会を聞く前と後では学術研究への心構えが変わったという人も多いのではないのでしょうか。そして、これらを生かす最初のお機会である合同巡検まで残りわずかとなりました！ 緊張している人もいますが、協力してよい実習ができるようにしていきましょう！